陽曆霜月晦日錦野客舍に筆を執る。遊天窟仙士座上に一詩を賦して似す、即ち收め錄す。曰く、

火可踐。水可投。　水火何敢辞。　世評笑狂愚。　丹心有誰知。
霽月心如鏡。　光風繫我思。　我思安可致。　浮雲淚方滋。
千古知己難。　悲吟遺愁詩。

# 文苑

## 先君墓碑陰記

稼堂陳人

家君名は八兵衛、加賀國石川郡專光寺村の人新納平兵衛が第四子なり、祖父九郎兵衛嗣なし、因て之を子とし養ふ、祖母新納氏が甥なり、性敏にして愼密、親に事ふること順、身を律すること正、十九父に別れ、能くその業を繼ぎ、農を勉め產を殖し、以て福を後昆に貽し給へり、我苛き世に生れたれば、學ぶこと叶はざりしとて、余に十八の時より、始て學を業とせしめらる、乃金澤に移り、常に寺詣なゝし給へども、佛は佞せず、幽明の際に徹見する所あるが如くなりき、壯にして膂力あり、相撲を好み、老て益壯、然るに明治癸巳の秋より、圖らず不治の病に罹り給ひ、翌年一月二日、終に眠るが如く身罷り給ひにき、年七十一、野田寺町桂岩寺の中に葬り奉り、順正院透得迷悟居士と諡す、吉藤勘右衛門が女を娶り、子女多く生ませ給ひしかど、皆夭し、後に一子を得たる、即余なり、庭訓あり、その言に曰く、人は、らしめを忘るな、男は男子志に、女は女

ちしい、分相應といふ、是その事、百姓は百姓、町人は町人、明治廿八年乙未秋八月、孫植撰書并建

## 醉月亭八景

敲月樓主人

蘇峰の雪

たち昇る煙にむすふ白雪の軒端に寒き阿曾の遠山

白川の月

都人見にもこよかし名にし立つ波に去らゆふ白川の月

無常堂の煙

起つとみる人の煙の消えゆくは是ぞ常なき世の詠なる

河瀬の水車

朝夕にめぐる河瀬の水車なるれは聲も靜けかりけり

出水神社の花火

窓近くいづみの杜にうちあぐる花火や空の星と落來る

錬兵場の喇叭

をさまれる世にもらつぱの聲聞ゆ雲のみたれや吹留むらん